

佐土原キリスト教会 2017年8月1日 礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 21 章 1～14 節

説教題：原点へ

1986年のことです。ガリラヤ湖の水位が物凄く下がったことがありました。その時、ガリラヤ湖の北西部の底の泥の中から1隻の舟が見つかりました。掘り返して詳しく調べたところ、何とイエス様と同時代の漁船だと分かりました。それで、それは「ジーザス・ボート」として知られるようになりました。長さ約8m、幅約2m、高さ約1mという舟です。今もイスラエルの博物館には「掘り出された本物の舟」と「それを基に再現された舟」が展示してあります。今日の箇所でペテロ達が乗った舟も、この同じ型の舟だと思われます。イエス様の時代を身近に感じることです。

「マタイ福音書 28 章」によると復活のイエス様は、墓にやって来た女達に言われました。「わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです」(マタイ 28:10)。弟子達はその言葉に従ってガリラヤに来たのです。そしてこの出来事を経験するのです。この出来事は一言で言うと「弟子達がガリラヤ湖で漁をしたら、イエス様のおかげで153匹の魚が捕れて、その後、イエス様と一緒に、イエス様が準備して下さった食事をした」という話です。ヨハネはこの記事を通して、「復活のイエスは、我々に食事の準備までして一緒に食事をして下さったのだ。イエスの復活はそういう確かな事実なのだ」ということを伝えたかったのだと思います。「153匹」という数字も、昔から色々と議論されて来ましたが、漁師は獲れた魚を分けるために魚の数を数えたのです。実際、数えたら「153匹」だったのです。ヨハネは、この出来事の実体性、現実性を伝えるために「153」という数字を書いたのだと思います。しかしヨハネが教えようとするのは、それだけではありません。この記事は、信仰生活の原点に帰ることの大切さを教えます。3つのこととお話します。

1：初めの愛に帰る

「ヨハネ黙示録 2 章 4 節」に「あなたは初めの愛から離れてしまった」(黙示 2:4)とあります。「初めの愛に帰らなさい」ということです。一晩中漁をしたけれど、何も獲れなかったのです。しかしイエスは「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます」(6)と言われました。これと同じことが以前にもありました。「ルカ福音書 5 章」、ペテロが最初の召命を受けた時のことです。夜通し漁をして、何もとれなかったペテロに、イエス様は、人々に湖の上から話をするので舟を出してくれるよう頼まれました。イエス様は話し終えると、ペテロに「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」(ルカ 5:4)と言われます。夜通しやっても何もとれなかったのです。「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう」(ルカ 5:5)とペテロが網を降ろしてみると、沢山の魚で網が破れそうになりました。ペテロは驚いて「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」(ルカ 5:8)と言いました。しかし、そのペテロに向かってイエス様は「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです」(ルカ 5:10)と言われたのです。イエス様からの召命の瞬間でした。21章のこの時も、網を打ってみると、魚が多くて網を引き上げることが出来なかったのです。力を入れて網を引き上げる度に、ペテロには「あの時と同じだ」という感覚が甦って来たはずで、ペテロは、イエス様に最初に召された時のことを改めて思い起こしたのではないのでしょうか。場所も同じ、状況も同じです。ペテロは、復活のイエス様から改めて召命を受け取ったのではないのでしょうか。

なぜ、ガリラヤに行くように言われたのか、その答えがここにあります。原点に返るということです。ペテロ達は、ガリラヤでイエス様と出会い、召されてイエス様と生活し、エルサレムにまで行ったのです。イエス様は、エルサレムで十字架に架けられて死んでしまわれました。全てが終わった、と思ったのです。しかし終わりではなかった。復活されたイエスが、あの最初に出会った場所で、同じ奇跡をもってペテロ達に出会って下さったのです。これから自分達は、人間をとる漁師として旅を

して行く。その時、復活のイエス様が共にいて下さる。そのことをペトロは受け取ったのではないでしょう。ペトロは「主です」(7)と聞くと、上着をまとして湖に飛び込みました。舟で岸に向かって岸まで 90m、時間は変わらないのです。しかもイエス様の前に出るからと、上着を着て飛び込んだ。ユーモラスというか、もっと言うと、間の抜けた行為です。しかし、これはイエス様に対する熱い思いによって突き動かされた行為です。ペテロは、原点を思い出すことによって力を得ているのです。この箇所は、それを教えているのです。

私達の信仰の歩みにおいても、「初めの愛に帰る」ということはとても大切だと思います。私共は信仰者として歩いていく中で色々な信仰の経験をして行きます。聖書の知識も身に付けます。しかしイエス様との出会い、洗礼を受けた頃の生き生きとしたイエス様との交わりの感覚、それは決して失われてはならないものだと思います。ある先生の教会に、1人の老人が訪ねて来ました。話を聞いたら、その方はその教会で60年前に洗礼を受け、熱心に教会に集い、教会で出会った女性と結婚し、その後、仕事の都合で遠くに引っ越した方でした。奥さんを10年前に天に送り、その後、どうしても自分が洗礼を受けた教会に行ってみたくなくて、息子に頼んで訪ねて来たということでした。老人は次の日曜日の礼拝に来て、60年前、洗礼を受けた時の話を涙ながらに証したそうです。牧師は言うておられます。「クリスチャンは、自分が洗礼を受けた教会のことを忘れることはない。そこで神に触れてもらった、それが『初めの愛』だと思います。その原点を思い出すと、それは今の困難を乗り越える力になるのです」。「AD」という映画では、後に牢に捕らえられたペテロが、イエス様に祈るのです。「主よ。あなたは私に『ペテロ(岩)』という名前を下さいました…私は、教会の岩になります」。そうしている内に、神の御手によって牢から救出されるのです。彼はその後も、イエス様との出会いを思い出しながら、困難な状況を何度も乗り越えて行ったはずです。

私達も同じではないでしょうか。信仰に迷う時があります。試練の中で揺すぶられることがあります。神を遠くに感じることもあります。その時、「初めの愛」、洗礼を受けた時というだけでなく、確かに神を経験した出来事、信仰を確かにされた経験、神に出会ったその時を思い出すことは、今の困難を乗り越える力です。それが私達を支えて行くのです、私達の信仰生活を導いて行く力になるのです。皆さんは、どのようにイエス様と出会われましたか。その「初めの愛」に帰りましょう。

2: 神の恵みに帰る

イエス様と出会う前、弟子達は、いつイエス様が現れるのか分からなかったのです。「ガリラヤに行け」と言われて、来てはみたものの、結局もう会えないかも知れないという思いもあったかも知れませんが、もしそうなったら、これからどうすれば良いのか分からないのです。さらに彼らには「自分達は失敗をした、信仰も弱かった、力もなかった、卑怯だった」という思いも依然としてあったはずで、ですからイエス様の復活に対して、一方では希望を持ちながら、一方ではこれからの歩みに対する不安、戸惑い、そのようなものに苛まれていたのではないのでしょうか。彼らが漁に出たのは、そんな彼らの落ち着かない、不安な心の現れだったと思います。しかし、彼らが再びイエス様に出会ったのはそういう時だったのです。

同じことが私達の信仰生活にも言えるのではないのでしょうか。申し上げたように、信仰生活には、時には「イエス様は私のこの困難な状況を知っておられるのか、神は私の祈りを聞いておられるのか、私に関わって下さるのか、最善を為して下さるのか」、そういう思いを持つこともあるのではないのでしょうか。しかしこの箇所は教えます。そういう時が、私達がイエス様に出会い直す時なのです。物事が上手く行っている時、恐らく私達は本気になって神を待ち望むことをしないのではないのでしょうか。

この時、弟子達は不安でした。しかし不安だったから、イエス様が御自身を現して下さるのを待ったのです。その待ち望んでいる時に、イエス様の声を聞いたのです。そしてイエス様に導かれて、状

況が変えられて行くのを経験して、イエス様が自分達を見ていて下さり、関わって下さる方だということ改めて確認するのです

そして、この箇所には食べ物についての記述が沢山あります。5節「イエスは彼らに言われた。『子どもたちよ。食べる物がありませんね』」(5)、9節「そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た」(9)、12節「イエスは彼らに言われた。『さあ来て、朝の食事をしなさい』」(12)、13節「イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた」(13)。ここにもヨハネのメッセージが—(イエス様のメッセージが)—込められていると思います。イエス様は6章の「5000人の給食」の記事でも、パンを与え、魚をお与えになりました。そしてその後、こう言われました。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています」(6:51)。イエス様を信じることは、永遠の命を与えられることですが、これらの言葉は、それだけでなく、「イエス様を信じ、待ち望む者には、イエス様は現実の満たしも与えて下さる」ということを語ろうとしていると思います。弟子達は、イエス様にもてなしてもらったのです。言葉を換えると、イエス様に励ましを、助けを頂いたのです。ここでは、弟子達は7人です。「7」という数字は「完全数」と言われます。つまり、この弟子達から始まるイエス様を信じる全ての人々の象徴です。この箇所は、その人々に、イエス様は、具体的な満たし、助けを与えて下さる、というメッセージを語るのではないのでしょうか。

私達にやって来る不安、戸惑い、困難、それらは、ある意味で私達が神様に会い直すチャンスの時なのではないのでしょうか。それは、そのような時こそ、私達は、必死に祈るし、神を必死に待ち望むという意味でそうです。つまり、そこで、私達は、神に、神の恵みに帰ることをするのです。するべきです。その時にきっと、神様の働きを、イエス様の励ましを、助けを、もてなしを経験するのです。そして、そこで神と会い直す経験が、その後の私達の信仰生活を支え、導いて行くのです。それが「マイナスがプラスになる」ということの1つの形ではないかと思います。困難を通らされる時、解決の道は神様に信頼し、神の恵みに帰ることです。

3：使命の原点に帰る

初めにも並行箇所を引用しましたが、イエス様が甦られた時、天使も言いました。「イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおりに、そこでお会いできます」(マルコ 16:7)。「ガリラヤへ行け、そこでお会い出来るだろう」。ガリラヤ、それは弟子達がイエス様に召された地であり、イエス様と共に神の国の福音を宣べ伝えて巡り歩いた地です。つまり「ガリラヤへ行け」、それは「宣教の原点、現場に帰りなさい。そこであなた方は、復活の主にお会い出来るだろう」ということです。しかし、彼らの宣教の働きは、決して易しいものではなかったのです。

3節に「彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった」(3)とあります。何を象徴しているかということ、それは宣教の難しさ、困難さ、私達に当てはめれば、ある人のために祈っても、祈っても、色々手を尽くしてみても、なかなか教会に来てもらえない、信じてもらえない、その空しさ、難しさ、そういうものを象徴していると思うのです。そして私達は、いつか諦めてしまうのです。

しかし、ここに励ましがあります。その弟子達が、イエス様の助けを得て、網一杯の魚を得るのです。ある本に、こんな励ましの言葉がありました。「『主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった』(マルコ 16:19~20)。弟子たちは出て行って、ひたすらがんばる、というのではありません。主イエスもその弟子たちと共に働かれる、というのです。弟子たちの語るメッセージの『確かさ』を示して下さる、というのです…弟子たちが

うまく語るからメッセージが伝わるのではありません。主が、弟子たちの拙いことばに『しるし』を伴わせてくださり、確証してくださるから福音は伝わるのです…主に確証していただくことにおいて、教会(信仰者)は、たえず新たに主イエスを見だし、主に出会い、生かされていくのです」(小島誠志)。私達が証しに生きる時、イエス様が助けて下さるのです。先日お送りしたレターに書いた話ですが…。Nさんは、信仰を持った頃は、熱心にご家族の救いのために祈っておられたのですが、どうにも難しい、それでいつしか諦めておられました。お兄さんは、統合失調症で50年間、入院しておられたが、ある時、お兄さんの身の回りのお世話をしておられたお父さんがケガをして、お父さんからお兄さんの世話を頼まるのです。Nさんがお兄さんのお世話をするために病院に通うようになってから、神様の業が始まるのです。お兄さんに「天国に行きたい？」と聞ける状況が不思議と与えられ、するとお兄さんが「行きたい」と答えたのです。すぐに、牧師に来てもらい、お兄さんを導いてもらい、お兄さんは、そこで信仰告白に至り、洗礼まで受けるのです。しばらくしてお兄さんは召天されるのですが、今度はそのことを聞いたお父さんが—(お父さんがキリスト教の信仰を持つ等、とても考えられなかったのですが)—「天国であの子に会いたい」と言って、信仰を告白して、洗礼を受けるのです。しみじみと「私は諦めていたのに、神様は諦めておられなかった」と語っておられました。「キリスト教は、あり得ないことが、あり得る世界である」とも言われました。神様を経験されたのです。

その時に大切なことは、イエス様の御言葉なのだと思います。弟子達は、イエス様の言葉に従った時、祝福を経験するのです。私達も、御言葉に本気で踏み出す時、私達の第一の使命である伝道(証し)においても、不思議を経験するのではないのでしょうか。私達は、家族に、親しい人に、天国に行つて欲しいです。天国で一緒に喜びたいです。御言葉に聞きながら、私達の「ガリラヤ(宣教の現場)」に帰りたくと願います。

4: 終わりに

イエス様と初めて出会った時、ペテロは「私は罪深い人間ですから私から離れて下さい」と言いました。でも今回はイエス様に向かって泳いだのです。十字架と復活によって、罪深い者に聖い神の力が働くことを恐れなくて良い時代が始まったのです。私達も、神が関わって下さることを期待し、喜ぶことの出来る時代に生きているのです。だからこそ、信仰生活の原点に帰りましょう。そして祝福の信仰生活を歩んで行きましょう。